

スガヴ方式の現状と問題点の展望

——CR・ルナール・ロベルジュ共著・斎藤征雄訳『SGAV方式による外国語教授法』の諸見解をめぐって——

丸 山 愛 子

一 序

二 『SGAV方式による外国語教授法』

a 「スガヴ方式の外国語教授法」

b 「スガヴ方式と原則」

c 「最近のスガヴ方式の発展」

三 むすびに代えて

一 序

かつてスガヴ方式にもとづく外国語教育の斬新さにおどろかされ、魅力を感じた筆者は、その方法的妥当性や実
際的有效性に、大きな関心を抱かざるをえなかった。

この方式の妥当性を根拠づけている言語学的・言語教育論的理論、およびこれに関連して提起されるべき若干の主要個別問題の解明について、筆者は従来より、ささやかながら努力をつづけて来たつもりである。

また、この方式の主張者たちの開催にかかるこの方式の原理と、この方式遂行のために教師側に要請される準備訓練のための研修にも、筆者は積極的に参加してみた。

他面において筆者は、(もちろん)特定された学習対象者と、特定された教育的条件のもとでの、スガウ方式による外国語授業の遂行について、主たる関心をもっていた。すなわち、日本人、それもとくに日本人大学生が学習対象者であり、大学の一般教養課程としての、必修ないし選択の第二外国語履修のケースなどの教育条件を、主として念頭においていたのである。

筆者は、スガウ方式によるフランス語授業を何度か大学で担当し、この方式による授業の有効性、その他の問題点について、その都度、いわゆるアンケート調査をもこころみてきた。⁽¹⁾

(1) スガウ方式にもとづく外国語教育にかかわる諸問題についての筆者の研究成果は次のものである。

「クレディフ S G A V 方式の成立とその理論的基礎」*Annual Reports, Vol. 1, The Division of Languages, ICU, 1976.*

「クレディフ初級教材のわが国大学仏語教育への導入——問題点の実証的検討——」*フランス語教育, 第四号, 昭和五年。*

「S G A V フランス語教育におけるいわゆる『一言語性』の貫徹について——問題の所在とその克服策の検討——」*成城法学「教養論集」第一号, 昭和五四年。*

「S G A V 初級フランス語教育における映像の役割と多義性(問題提起)」*成城法学「教養論集」第二号, 昭和五六年。*

「映像理解における多義性の現実への一検討——モージュ・ルージュ教材画像の調査を中心に——」*成城法学「教養論集」第三号, 昭和五七年。*

さて、フランスで製作されたフランス語視聴覚教材は、近年ますます豊富になった。かなりの種類のものが揃っている初級教材はいうにおよばず、中級・上級用教材や、特定分野の専門用語学習用の教材などにおいても、かなり多様な視聴覚語学教材がみられるようになったのである。しかも視聴覚機器のわが国での普及とあいまって、わが国大学のフランス語教育においても、これらフランス製視聴覚教材が漸次とり入れられつつある。

いまや、わが国大学の外国語教育、とくに第一外国語教育における視聴覚教育方法の意義とあり方などについて、真摯にとりあげ、これを議論すべき背景が備わりつつあるように思われる。

元来スガヴ方式とは、第二次大戦後フランス政府が、フランスの威信をかけた形で、周到なる準備をへて結実させた、フランス語およびその他の語学視聴覚総合教材を使用するの独特な授業方式である、いわゆるクレディフ視聴覚全体構造方式のことをいう。いわばこれは、本格的な視聴覚語学教育方法の開祖であり、大本山の地位をもつべきものである。これは確固たる言語理論的・言語教育論的基礎に立つものである。そしてこれにもとづいて開発された視聴覚総合教材は完備し、授業の進行についても、単元毎に、また単元内では授業進行の段階毎に、細部にわたる教授方法の指示をそなえている、きわめて緻密にして独創的な実践的指針をもつものでもあった。

かくて視聴覚語学教育への関心と議論とは、クレディフ・スガヴ方式へのそれが中心となるのがきわめて自然である、ということになるであろう。この方式についての十分な検討なしには、視聴覚語学教育について、いかなる態度もとれないと考えることも、あながち不自然であるとはいいがたいであろう。

にもかかわらず、残念ながら、クレディフ・スガヴ方式にもとづくフランス語教育は、わが国の一般大学では、未だあまり普及をみてはいない。しかも、この方式をめぐる研究や批判も充分におこなわれ、成果をあげているわけではない、というのがわが国の現状である。われわれはまず、何よりも、邦語によるクレディフ・スガヴ方式に

関する権威ある概説ないし手引きをのぞみたいところである。

このたび公刊された、R・ルナルおよびC・ロベルジュ著・斉藤征雄訳『SGAV方式による外国語教授法』*Sophia Linguistica: Working Papers in Linguistics*, Number 14, The Graduate School of Languages and Linguistics, Sophia University, 一九八三年 はこの意味において、まことに時宜をえたものではなからうか。

本書はその「まえがき」からもうかがえるように、グバリナの主唱するSGAV方式(*la méthodologie structurale-globale audio-visuelle* の頭文字をとった略語・視聴覚全体構造方式)による外国語教授法の、ヨーロッパでの代表的理論家であり、この方式の普及者でもあるレモン・ルナル Raymond Renard モンス大学教授と、わが国でのこの方式の普及者であるロード・ロベルジュ Claude Roberge 上智大学教授とが、共同して、日本人、とくに日本の大学における第一外国語教育に視点を据えつつ、スガヴ方式の理論と実践について概説したものである。

二 『SGAV方式による外国語教授法』

「まえがき」によれば、本書はルナル教授の高名な著作『スガヴ的言語教育方法論——ことば学習の諸問題——』第二刷、一九七九年、*La méthodologie SGAV d'enseignement des langues: Une problématique de l'apprentissage de la parole, 2e tirage*, Didier, Paris, 1979. をもとに、ロベルジュ教授が日本におけるスガヴ教育の経緯を基礎に、若干の章を加筆した形のもを底本としてしているようである。

本書は次のような構成をとっている。

0 まえがき

1 スガヴ方式と外国語教授法

- 2 スガウ方式の原則
- 3 最近のスガウ方式の発展
- 4 結論
- 5 スガウ方式に関する文献⁽¹⁾一覽

(1) 本書の主要内容を構成している部分は、いうまでもなく、1、2、3、の部分である。このうち1、3は、ルナール教授の前掲著作の序文と結論の部分を除いた、残りのほぼ全部を意識したものである。2は、ロベルジュ教授がルナールの前掲著作を参照しつつ、自らの理論を展開した部分のようである。5には日本語文献も示されている。

本書の構成からも容易に推測されるように、本書は、とくに日本の実情を考慮した上でのスガウ方式に関する概論、書たらんとするものである。

そもそも概説を目的とする書物の内容について、原著作よりも一層簡にして要をえた有意義な紹介をすることには、予想外の困難をとめない、かつ紹介者の高度な学問的素養をも必要とするであろう。これは筆者のよくなしうるところではない。

したがって、やや恣意的になるかもしれないが、筆者は自らの関心にしたがって、スガウ方式の日本の大学第二外国語教育への適用にかかわる側面の問題に注目しつつ、本書の内容を以下で紹介してみようと思う。

a 「スガウ方式と外国語教授法」

「スガウ方式と外国語教授法」と題された編は、本書を構成する第一の主要内容が展開されている部分である。ここでは、独得の外国語教育方法としてのクレディフ・スガウ方式の開発と生成との跡づけ、具体的教材にもと

づく授業の進め方の紹介、およびこの方式の外国語教授法に関して提起さるべき若干の問題が展望されている。文字通り基本的でかつ概論的部分だといえることができるであろう。

本編において著者は、外国語学習の場所、動機、目的などが多様化してきた現実世界での変化に対応して、外国語学習は、かつてのように一部の知識階層の先進外国文化の摂取のための、翻訳的能力の涵養のみを目的とするものではなくしたとする。いまや外国語を読み、書き、聴き、話す、という四つの能力をバランスよく開発して諸国民間の対等なコミュニケーションに資すべきことが、外国語学習の要諦であるゆえんを強調するわけである。そして「文化の媒体としての役割を果たすことばを、四つの能力で使用することが、外国文化を理解する最良の方法である」(五ページ)とも著者は主張している。

著者は、クレディフ・スガヴ方式を、かかる今日の社会的要請に応えるべき、もっともすぐれた外国語教授法として位置づけているのである。

ついで著者は、クレディフ・スガヴ方式の生成過程を展望する。ここではスガヴ方式を確立させた人たち、すなわち、フランス語基礎語彙の確定と公表から、最初のスガヴ教材ともいえるべき *Voix et Images de France I, 1961* の製作に結実したクレディフ・サンクルー・グループの業績や、「言調聴覚論」*Le système verbo-tonal* を基礎に、視聴覚全体構造方式であるスガヴ方式を生みだした、P・グベリナを中心とするザグレブ・スガヴ・グループの業績が紹介されているのである。

著者は、スガヴ方式、すなわち、本書の訳語でいえば「全体構造視聴覚方式」は、次の三つの概念を柱に生れたものであるとする(九一一ページ)。

1 言語の構造的な概念(ソシュールやトルベツコイ派の言語学をその背景としている。各国言語がそれぞれ独自

の構造体系をもつことから、教育方法上の帰結として、翻訳や母国語参照の排除という考え方を導きだす。また、構造概念は、動作、身振り、状況といった言語的要素をも含む言語活動全体におよぶという根拠から、言語学習の最適条件の探究、状況設定の中での学習という教育方法的帰結もてくる。

2 言語心理学上の概念(母国語習得過程と人間形成の過程とは密接に結びついている。したがって外国語学習は、自我を外部から侵犯するものとして、学習者に無意識の抵抗を起させることになる。この抵抗を弱めるためには、できうる限り妥当で統合化された学習環境を備える必要がある。ここからも、言語活動の全体的構造性をうまくひき出すような状況設定の中での学習という教育方針がでてくるのである。)

3 口語優先の方法的な概念(言語学上の成果としての話し言葉優先を重んじ、外国語をリズムとイントネーションをもって全体的に把握すべきだとする。したがって、書き言葉学習の時期をかなり遅らせることとなる。)そして「これら三つの柱を基礎とする外国語教授法『スガヴ方式』を生みだした、グベリナの理論は『言調聴覚論』と呼ばれる」(一一ページ)として、この理論の概要を著者は紹介するのである。

ここでは、ふだんわれわれが音声信号を理解するのに、その一部を把握するだけでこと足りていること、すなわち、ごく限られた不連続の周波領域で音声信号を統合し理解するだけでこと足りているという、聴きとりの統合作用に注目する。その上で、外国語音に対する音韻的難聴者ともいべき学習者に向けて、次のような学習方策を提示する。すなわち、

- 1 聴きとりを妨げるので文字を示さない。
- 2 リズム、イントネーションを備えた構造(とくに文)を最小限の学習単位とする。
- 3 身振り、手真似、話の間のあい、など言語活動のあらゆる要素を動員する。

4 初期段階では、聴きとりが難しいとされる外国語音をふくむ単語については、その音韻的特徴をきわ立たせるような前後音との組合せをもつ単語のみをテキストに採用する。

さらに、言語活動の全体的・構造的概念にもとづいた方策として、

5 学習者に特定の構造文を押しつけるよりも、むしろ学習者が即興で、構造選択をおこなって文を作るように仕向ける。

などの方策を示しているのである。⁽¹⁾

(1) 前述の諸方策は、とくに母国語体系の抵抗を制禦するのに効果あるものである。5番目の方策の記述は本書にはみられない。しかしこれはグベリナの全体構造理論および言調聴覚理論とこれにもとづく外国語教育実践との橋わたしをする重要な事項の一つとルナルルおよび筆者もまた考えているので、本書の底本であるルナルルの前掲書、一五ページの記述によって、この部分を補っておいた。

つづいて著者は、既述のクレディフ・スガヴ方式によるフランス語初級教材 *Voix et Images de France* を例に、この方式による外国語授業の経過を紹介する。これによって、スガヴ方式にもとづく授業遂行をかなり具体的に説明するわけである。

すなわち、この教材は、各課毎に、

1 スケッチ (日常生活の一コマについての、会話場面による、基礎的語彙や表現の学習)。

2 メカニズム (短い会話による小場面を使つての、語形変化や文構成の学習)。

3 発音訓練 (場面を使つての難しい発音の訓練)。

の授業が順次遂行されるよう、組み合わせられたものから構成されている。

- まず、1のスケッチと称する中心的授業は、次の五段階⁽¹⁾を通じておこなわれる。
- a 映像を伴なう音声の全体的・順次的提示の段階。
 - b 一コマずつの映像と、それに対応する音声とを流し、反復させる段階。
 - c 音声と映像とを提示しつつ、言いかえや身振りによる説明によって、台詞をグローバルに理解させる段階。
 - d 映像のみを提示しつつ、台詞の記憶を定着させる段階。
 - e ささまざまな方法による応用の段階。

(1) 著者は「暗記は機械的なものでなく、理解を伴ったものであるから、理解と記憶の段階は一つであるといえよう」(一七ページ)とのべて、前述の五段階を四段階と考へてもよいとしている。
 また、本書の別の所では、スガヴ方式による授業の四段階として、これとはやや表現を異にする呼称も使用している。すなわち、次のようである。

4	応用段階	応用段階	応用段階
3	理解・記憶段階	理解段階	記憶段階(理解による)
2	反復段階	反復段階	説明段階
1	提示段階	提示段階	提示段階
(二六一―二七ページ)		(三一―三二ページ)	
(四二―四三ページ)			

2のメカニズムの授業においては、文法学習が進められる。

この場合、文法学習とは、従来文法学者が分析し、体系化した文法を教えるのではない。「生徒自ら文法を発見してゆく」(一八ページ)ための、「絵による文法」ないし「場面による文法」の学習であるべきだ、と著者は考へている。聴覚訓練を重視するスガヴ方式では、特定のいいまわしを軸に組みたてられる会話形式^{シナリオ}にもとづく文法

学習がおこなわれるわけである。ここでも1のスケッチと同様の段階に分けて順次授業が進められてゆく、と著者はいう。

(1) スガウ方式による文法学習の具体的進め方に関する著者の説明には、明瞭を欠くものがあるように思われる。

これは、何よりもまず、スガウ方式の主張する「話しことばの文法」について、その全容が未だ確立されず、したがってこれを明確に示した文法書が未だ存在していないことに起因するのではなからうか。

ちなみに、本書の別の所には、文法(書)について次のような説明がある。

「話しことばの文法は、音声、語形、構文の部門の他に、感情性の部門を加えることによって、完成されたものとなる」(五一ページ)。

「話しことばをも対象とする新しい文法は、言語的要素を理解するだけでなく、プロゾディという超言語的要素をも理解し、習得するための文法でなければならない」(六九ページ)。

また八九ページでは、「話しことばの文法書の中に、文体論を採用すること」が必要である」とし、「文脈の文法」についての研究の進展についてのべられている。

スガウ方式による文法学習については、本書の終りに近い部分でもう一度触れられている。内容のかんりの部分ばかりかえしではあるが、ここにその梗概を示しておこう。

著者によれば、文型練習や文法用語を使用しての、いわゆる伝統的文法学習は、聴き、話し、読み、書くという外国語の四基本能力をバランスよく習得するための方式である。スガウ方式のとらぬところである。スガウ方式においては、文法学習は、いわば学習の最終段階に位置づけられる。すなわち、「いわば、答えを発見する段階であって、答えを教える段階ではない」(七〇ページ)と、その応用段階での文法学習は、話し言葉をもとにした「シナリオ」形式による練習であって、文法用語を用いないでなざるべきものである、と著者は述べている。そしてスガウ方式による文法教育の様式の一具体例を紹介しているのである(七一―七三ページ)。

3の発音訓練については、著者はこれを1のスケッチ、2のメカニズムの学習にもまして重要視する。そしてい

いわゆるグベリナの言調聴覚論にもとづく、発音指導ないし発音矯正の方法を、具体例に則して示しているのである。著者は、外国語教授方法としてのスガヴ方式の原理的優秀さを強調する一方で、比較的謙虚にこの方式の現状について反省をもしている。すなわち、スガヴ方式が、教材作成、会話場面の設定、利用条件の特殊性、教師のあり方、教師研修の必要、などの諸側面で、なお改善ないし克服すべき問題をかかえていることを率直にみとめているのである。

同時に、多方面から寄せられた、スガヴ方式へのさまざまな疑問について、一々ていねいに解答し、また解決策の例示をもしている。曰く、

- 1 教師はロボットにすぎないのではないか。
- 2 教育の準備にコストがかかりすぎはしないか。
- 3 教材内容がやさしすぎはしないか。
- 4 言語の文化の媒体としての側面を軽視しすぎてはいないか。
- 5 オームがえしの授業ではないか。
- 6 子供が母親などから母国語を覚えるような教育方法ではないか。
- 7 大学生学習者などが、知的欲求不満になりはしないか。
- 8 学校組織などでは採用しにくい条件をもっているのではないか。

b 「スガヴ方式の原則」

「スガヴ方式の原則」と名づけられた編は、本書を構成する主要三内容の内、第二の部分を形成している。

ここでは、前述したスガヴ方式の概説を基礎に、スガヴ方式の授業を支えている特徴的手段、すなわち、リズムとイントネーションおよび映像をクローズアップして再びとりだし、一層詳細に叙述しているのである。

著者はまず、スガヴ方式にもとづく外国語授業が、発音、とくにリズムとイントネーションを徹頭徹尾重視することの意味を再び強調する。

そして著者は、かかる言調聴覚論の見解を、失語症の治療や幼児の言語学習に例をとりつつ、音響学や言語病理学、心理学、生理学などの領域からの証拠によって、正当づけているのである(三一—三五ページ)。

たとえば、著者によれば、授業にあたっては、教師は「モデル音のリズムとイントネーションを変えてはならない」(三一ページ)。リズムとイントネーションの正しい習得によって、学習者はヨリ早く、ヨリ効果的に学習し、ヨリ容易に外国語の世界にとけこむから、というわけである(三一ページ)。

ついで著者は、リズムとイントネーションの役割を重視する聴覚教材たる音声テープ教材と並んで、スガヴ教材のもう一方の柱となっている視覚教材、すなわち、映像教材についても再びとりあげ、これについて比較的具体的に叙述している。

著者はまず、映像教材のあり方、およびその外国語教育に果たす役割から論をすすめる。

著者は、視覚教材としてはスケッチ的なスライドが最適であるとす。これは必要な情報だけを伝達しうるように描けるし、しかも話しの展開にもなつて、一コマ一コマづつ順次関連させて描きうるからである。

授業の進行にもなつて順次うつしだされるこの種の映像は、話しを漸次一義的なものに、理解可能なものに絞つてゆかしめるであろう。いわばこの場合、「映像は(…)文脈を作る役割を果たすのである」(三八ページ)。こうして映像がテープ音声の内容の解釈を限定してゆく形で、映像と録音とは、互いに相助けて、相互に解説性を高める

ことになる、と著者は考えるわけである。

ついで著者は、映像の効果についての実地（の統計的）調査を、方法的基礎について述べることなしに紹介する。そして結局、映像が、

- 1 恣意的記号にすぎない外国語の理解を助ける、
- 2 表現を現実結びつける、

- 3 発音と聴きとりの学習を容易にする、

という機能をもつと結論づけた（四二ページ）。

この結論をもとにして、著者は、スガヴ方式による授業進行の各段階において、いかに映像を用いるべきかについての具体的紹介もしているのである。

つづいて著者は、スガヴ方式の授業遂行に関連する若干の問題について再述する。

まず、強い動機と目的をもった学習者を対象とする、集中方式の授業として出発したスガヴ方式の授業を、日本の大学の必修第二外国語の履修のように、集中授業方式も採用できず、学習者にも強い動機と目的が欠けているようなケースに、いかにして適用すべきかの問題提起がなされる。

また、外国語習得と文学教育に関連して、「文学を真に知る唯一の道は、文学語と比較すべき対照としての日常言語を知ることによって開ける、というのがスガヴ方式の考え方の根本であった」（四六ページ）と著者は主張している（文学学習のための、スガヴ方式によるフランス語学習については、後に再びとり上げられる）。

さらに著者は、まず外国語学習の出発点として、さまざまな思考行為を想起する。ついでその思考行為の、状況や文脈などに従ったパロールのレベルでの意志伝達行為への進行を考える。そしてこの場合、状況とならんで感情

性が、いかに大きな役割を果しているかについて説明するのである。これはコミュニケーションにおける非言語的要素の重視であり、感情性の働きを言語教育にとり入れるべきことを著者は主張しているわけである。

その他、知覚の選択と結合の能動的な働きである外国語教育における聴きとりの問題、外国語教育に対する応用言語学の貢献、スガウ方式の授業を進めるにあたっての、学習者や教師の側の備えるべき条件、学習上のストラテジーの問題などが、若干の調査データなども加味された上で、再び詳述されているのである。

これらの論述は、日本人学習者、ないしとくに日本人教師に向けて執筆されたと思われる点で、たしかに興味ふかいものがあるであろう。しかしながら、議論の展開は必ずしもつねに非常に厳密というわけではなく、時として体験談などがストレートに織りこまれてもいる。しかも、ここでの論述は、スガウ方式への礼讃の志向が⁽¹⁾つよすぎ、却って最良の引きたおしになってしまっている感もなくはないのである。

(1) 本書全巻を通じていえることであり、また本書の目的ないし性格上致し方ないことでもあろうが、著者は、スガウ方式による外国語教育の理論的・方法的基礎づけにおいて、これが最新の言語学・心理学・生理学・教育学・哲学の成果を統合した体系的・一貫性と「崇高さ」を持つものであることを非常に強調し讚美する。

しかしながら、外国語教育方法論は、他面あくまで実践にかかわる問題でもある。したがって、方法の評価にあたっては、方法論自体の論理構成や、それが外国語習得に本質的に適合したものであるか否かという本質的側面とともに、この方法がいかに合理的・能率的に学習の成果をあげうる実践体系であるか、という効率性の側面をもつねに併せ考えなくてはならないであろう。

筆者が本書について期待しなかったものの一つは、まさにかかる効率性をめぐる記述であった。

c 「最近のスガウ方式の発展」

本書の第三の主要内容を構成しているのは、「最近のスガウ方式の発展」と題されている編である。

ここではスガヴ方式の発展を促した諸要因と、その教育理論上の主要特徴とが展望され、併せてスガヴ教材のうちの一部が、それがもつ特色を中心に紹介されている。

スガヴ方式による外国語授業の方針は、学習者の要請を最重要視することによって、他のあらゆる革新的・独創的なものと同様な経過をたどることとなった。すなわち、当初の原理を厳格に教条主義的に遵守することによる、教材作成や授業遂行の姿勢から、漸次、多様な、柔軟な対応へと方針が変わってきたのである。

たとえば、学習の展開過程における、既述のスケッチとメカニズム練習との区別や、四段階の順次の経過による授業進行原理に、つよくこだわらなくてもよい、とするようになってきた。

また、教育課程の短期、中期、長期といった多様化に対応して、外国語学習の段階的向上のための工夫もなされるようになった。すなわち、聴き、話す練習による外国語でのコミュニケーション能力の獲得（短期）にはじまり、読み書きの能力の充実による、文章の読解や表現力の向上（中期）、ついには外国語を全体としてとらえ、文法や表現様式を区別し、高度な自己表現とヨリ深い理解へと到達させるべき（長期）目標に適合するよう、教育課程が工夫されるようになったのである（六六ページ）。

(1) 現実の要請に対応したスガヴ方式の柔軟な姿勢は、七六一八五ページで紹介されている最近のスガヴ教材にみられる目標や授業様式の多様化、弾力化にも、明瞭にみとめられるところである。

また、ここでは、スガヴ方式による実際の授業に関連して、本書の読者が重大な関心を寄せざるをえない、文法学習の問題も再びとりあげられている。しかし、これはすでに紹介したので再述しない。

最後に著者は、高度な専門教育課程へのスガヴ方式による接近について叙述している。換言すれば、専門各分野のテキストを読み、かつ理解できるようにさすべき、スガヴの方法による学習について述べているわけである。例

として経済学と文学がとりあげられている。

このうち経済学の学習については、比較的無難なスガウの接近方法が紹介されている。しかし文学学習へのスガウの接近の紹介例は、やや注目に値しよう。

既述のように文学学習の場合、スガウ方式とは、「文学によってことばを学ぶのではない。(…)逆にことばを身につけてから文学を学ぶことである」(七五ページ)、という注目に値する象徴的文句で表現されるような基本態度から生れる学習方法をいう。

ここでは、「文学テキストを出発点にして授業をすすめるのではない。それは到達点として授業の最終段階で提示される」(七四ページ)、というような授業方式が採用される。

著者は、カミュの作品『異邦人』からの抜粋文を例にとつて説明する。スガウ方式による授業においては、学習者がカミュの原文を読まされるのは、スガウ方式による周到なる準備のための長い授業過程を経た後である。それぞれ意味のある一〇の授業段階をもつて、カミュの抜粋文一パラグラフを読み、理解し、味わう授業は終了するのであるが、その最終に近い段階にいたつて、はじめて学習者をしてカミュの原文に接しめることになるわけである。⁽¹⁾

(1) これはたしかに、文学学習への本質をついた有効な接近方法ではあろう。しかしながら、実際の授業としては、原文を読むに至るまでに、気が遠くなるほどの長い準備の時間と、煩雑な手順を必要とてはいないであろうか。

学習には安易な近道はなく、したがって本格的学習には、「急がば回れ」ということはたしかに真理ではあろう。しかし回り道があまりにも長すぎると、到達すべき目標を見失うおそれなしとしない。

ちなみに授業の一〇段階とは、次のものである。

1 テーマないし情景に関することを学習者に話させる。

- 2 テキスト中の新しい語や表現を、普通の用法で教える。
 - 3 文中の「語り手」の心理状態を学習者に想像させ、表現させる。
 - 4 抽象的語彙をあたえる目的もあって、1～3の間に作文練習をさせる。
 - 5 作文訂正によって学習者の表現力をのばす。
 - 6 5の最良の出来の作文を読みきかせてさらに学習者同士で表現を検討させる。
 - 7 テキストを録音で聴かせ、感じとらせる。
 - 8 録音を聴いた印象を学習者に語らせる。
 - 9 テキストのコピーを与え、朗読させ、分析に入る。
 - 10 作家の名を告げ、作品全体や、作品の時代背景を説明する。
- 前記一〇段階にわたって進行してゆく授業においては、つねに当該外国語のみが使用されるのが原則となっていることは、いうまでもない。

三 むすびに代えて

もし筆者の理解にして誤りがないとするならば、以上に紹介したところが『S G A V方式による外国語教授法』の主要内容であった。時に応じて筆者は、これに若干のコメントをも付記しておいたつもりである。

独創的な外国語教授方法としてのスガヴ方式の理論と実際とは、本書によって、わが国でも広い範囲の人々に、かなりの程度明確に理解されるべき契機があたえられた、と考えてよいであろう。

筆者は、本書と取り組むことを通して、多くの点で、スガヴ方式にたいする筆者の理解に誤りのなかった保証をえて、大いに意をつよくした。のみならず、若干の点では、筆者は本書によって蒙を啓かれたのである。

にもかかわらず、筆者がスガヴ方式にたいし長年いだいている二、三の問題点についてはこの書物は、充分満足

すべき説明ないし解答をあたえてくれない憾みがある。これは、概論書としての役割を持つべき本書の性格からみて、致し方のないことかも知れない。ここでは、これらの問題点についてのコメントを記すことによって、本稿のむすびとしたい。

その第一は、スガウ方式の外国語授業における、読み、書きの学習の時期や方式にかかわる問題である。

既述のように、本書においては、スガウ方式の外国語学習をもって、聴く、話す、読む、書く、という外国語の基本四能力をバランスのとれた形で向上させることを目標としている。この考え方は、外国語学習の核心をついたものであり、この限りでは筆者にも異論はない。

しかし本来、スガウ方式は、あくまでかかる四基本能力の内、外国語を聴きとり、話す能力の開発に重点をおくものであった、と解すべきものである。スガウ方式による実際の教授法における、あらゆる創意工夫は、ほぼこの能力の開発に集中していた、といっても過言ではないであろう。

したがって、本書においても、読み、書く能力の開発の訓練については、きわめてわずかしかふれられていない(二三―二四ページ)。しかもここで述べられていることは、主として正書法の早期学習への批判、書き言葉から学習を開始する場合の弊害の指摘、学習者が会話能力をある程度備えてから、書き言葉の学習をはじめべきだ(学習開始時)、といった書き言葉の学習にとって消極的な事項であった(尤も、スガウ教材の多様化にもなつて、教材 Archipel, 1980 のように、文字と文法を初期の段階からあたえてしまう教授法をもつ教材も開発されている。八四ページ参照)。

そして書き言葉の学習の具体的あり方についての積極的叙述は、教材 *Voix et Images de France*, II, 1965 の簡単な紹介を通してなされているのみである。また、読みの学習については、前節二のcで紹介した専門学習の方法

に則して、述べられているのみであった。

本書における、このような紹介だけでは、聴き、話し、読み、書くのバランスよき外国語学習は、一体如何になるべきか、についての具体的な様式はあまり明確なものとはならないであろう。

またこれは、スガヴ方式のわが国第二外国語教育への導入にあたっての、最重要な問題点を構成する、読む学習中心の中級課程へのスムーズな接続、および中級課程におけるスガヴ方式授業の採用とその具体的進め方、についてもかなり不明確な点を残している、といわざるをえない。

第二に問題となる点は、外国語学習における一言語性 *Ein Sprachigkeit* の貫徹についてである。

学習すべき外国語のみを使用して、終始授業を進行させるいわゆる一言語性にもとづく授業は、スガヴ方式に特有の基本方針のほゞである。したがって、本書においても同様の立場がとられていると考えてよい。しかしながら、本書においては、いわゆる一言語性について述べているところが殆んど無い。このことを当然の前提としているからであろうか。⁽¹⁾

(一) 本書においては、外国語学習における母国語の使用や母国語からの影響を排除すべしという原理の説明について若干ふれている箇所はある(一〇、一二ページ)。しかし授業進行中の母国語参照の禁止といった具体的事項については、次の記述から逆説的に察せられるのみである。「スガヴ方式の授業においては、授業に入る前に、生徒の母国語で授業の内容と方法を説明し、教授法の正しさと、その効果を生徒に納得させるための、特別な時間をもうけている」(二八ページ)。

しかしながら、外国語教育にあたっての一言語性の貫徹には、その本質的な意義を高く評価する側面とは別に、これが授業能率に関連して、どこまで、またどのように貫徹すべきか、が問われなければならないのではなからうか。さらには、一言語性を貫徹させた外国語授業において、学習者の理解の正しさと誤り、その誤りの程度や個

所などを、早い時期に教師が知るための適切な手段は、一体必要なのであるか、もし必要だとすればそれには如何なる手段があるであろうか。これらの事項に関して、本書はほとんど何も述べていない、⁽¹⁾といつてよい。

(1) ただし本書は、現実の多様な条件に柔軟に対応すべく、母国語による説明をとり入れた教材として、*Exercises d'expression*, 1975. の紹介をしてはいる。そして次のようにいう。「リヴァンクが教材の序文で明言しているように、母国語による説明はスガヴ方式の理念から外れるとしても、『有無を言わせぬ実際の理由がある場合は許されるのであり、どのような方法論上の信念も、その原則を緩めなければならぬ』のである」(七九—八〇ページ)。

第三に問題にしたいのは、スガヴ方式の外国語授業を推進してゆくにあたっての、教師の任務にかかわるものである。

スガヴ方式の授業を行うにあたって、教師の力量がもっとも問われるのは、いわゆる応用段階の授業であろう。

「スケッチ」の応用段階の授業の様式として、たとえば、本書、一七一—一八ページでは、

- 1 演劇的方法(学習者の表現意欲を駆りたてる)。
- 2 絵に則しての質疑応答。
- 3 表現の活用(新たな絵による質疑応答など)。
- 4 絵を用いない応用(スケッチを基にしながら、これとは異なったテーマの会話)。
- 5 表現形式を変える練習(会話形式を叙述形式に変えさせる)。
- 6 叙述形式から、会話形式に変える練習(物語を会話体作りかえさせる)。
- 7 会話や物語の続きを作らせる。
- 8 学んだことの自由な応用練習(学習者にテーマを提示させ、会話をさせる)。

が例示されている。

しかし、各課それぞれに詳細なる例示的指示をもつ整備された教授指導書が存在する場合を除き、これらの様式のそれぞれによる練習について、ネイティブ・スピーカーでない教師が、果してこれを当該外国語で有効適切にこなし、学習者を指導しうるであろうか。相当程度の研修を教師が積んだとしても、なおこのことにはかなりの困難が伴うのではなからうか。

外国語のもつ文化媒体的役割を重視し、当該外国文化の深い理解者ないし研究者であることが、大学語学教師の必須なる前提条件として要請されている、日本の大学のようなケースにおいて、かかる教師に対し、研修をさせて、スガヴ方式の授業をこなせる能力をも兼ね備えさせるよう仕向けることは、心理的にも、非常に困難なことにように思われてならない。本書は、かかる問題には全くふれていないのである。

とりわけ日本人語学教師の発音訓練能力の獲得についての障害はおおきいといわばならないであろう。スガヴ方式によって学習者の発音訓練をすべき日本人の大学教師は、まさにそのスガヴ方式によって、教師自身、前もって十二分の発音訓練を受けることによってのみ、それが漸くなしうるといふことは皮肉というほかはない。

換言すれば、スガヴ方式における発音の重視は、音声学についての十分な研究と、母国語の音韻体系と外国語のそれとの相違から生ずる発音上の障害点についての実践における熟知、という能力の所持を、必須なる条件として教師に要請しよう。しかも教師自身、発音が正しく聴け、リズムとイントネーションを正しく備え、かつ微妙な感情性を正しく表現しうるような発音ができ、その上で学習者のかかる障害点を容易に識別しえなければならぬ。このような能力は、日本人一般はとくに持ち合わせていないことが多いように思われる。このため、日本人教師のスガヴ的発音研修は必須なものではあるが、それがある程度の成果をあげうるまでの訓練には言語を絶する困難を

ともなうであらう。

このことは、スガウ方式が基本的にはネイティブ・ティーチャーによる授業の方がより適切ならざるをえないことを暗示しているのではなからうか。スガウ方式によるフランス語教材の開発と普及とは、これらのものの輸出であるとともに、フランス人教師の輸出をも意味するかも知れないであらう。

本書は、スガウ方式による外国語教育をわが国にも普及させたいという意図をもって公刊された、きわめて有意義な著作である。またそれが、かかる意図ないし任務を、おおむね果すに足る、すぐれた内容をもつものであることを、筆者は毫も疑うものではない。

スガウ方式論は、現在では、開かれた体系であって、決して完結した閉鎖的体系ではなくなっている。外国語学習の諸条件の多様化にに応じて、常にあらたな試みや実践をともなっている。これは生成発展してゆくものである。

このようなクレディフ・スガウ方式論者たちの今日的姿勢が、本書全体を通読してひしひしと感ぜられる。⁽¹⁾

- (1) 現実の諸要請にもとづくスガウ方式による外国語授業の多様化は、きわめて自然ななりゆきではある。しかしそこには問題がないわけではない。たとえばスガウ方式の主唱者の一人であるリヴァンク教授夫妻は、この多様化が、現実の実践においては、時として原則の順守なき妥協におちいり、スガウ方式の原則の歪曲を生み出したという。そしてこれが好ましくない学習成果しかあげえなかつた次第を実例に則して述べているのである。M. M. Chilet-Rivenc, Evolution des pratiques pédagogiques communicatives SGAV au cours des vingt dernières années, in: *Revue de Phonétique Appliquée*, Nos 61-62-63, Université de l'Etat à Mons, 1982. 参照。

元来、R・ルナルの底本は、スガウ方式論の総括と問題提起とを指すとともに、スガウ方式を実践している教師向けの教授法理論書をも兼ねているものである。したがって、クレディフ・スガウ関係の人々には周知の事柄

となっている点については、具体的説明を省いた抽象的記述となつているところも多い。そのためにか、スガヴ方式による授業の経験のない教師からみると、難解な感を免れないかもしれない。本書において訳者は、底本の本文を若干取捨選択し、かつ補完ないし解説を加えて訳出している。その補足や解説の部分はおおむね妥当であつて、訳者の努力のほどがうかがわれよう。

とはいへ、全巻を通してみると、本書は、場所によつて、論理構成に若干の精粗の差がみとめられる。また、いくつかの事項にたいする説明に不統一がみられぬこともない。しかも論述のトーンは、やや断定的にすぎるきらいもある。⁽¹⁾ 公刊にはいろいろ制約された条件もあつたであろうが、本書は、ギッシリつまった活字の横組み四三行で一ページが構成されている。それゆえなかなか読みづらい概説書であるといえるであろう。三ケタにのぼる誤植や誤記が本書にみられるのも、この意味ではやむをえないことであつたのかもしれない。しかし、言語学や言語教育論などの書物には、その本性上、かかる誤りはゆるさるべきではなからうと筆者には思われる。本書のために惜しまれてならない。

(1) たとえばルナルの書物を底本としている部分では、底本がベダンティックな表現の文に終始しているのに反し、本書では、かなり断定的な表現の文章の形で訳出されている。しかも既述のようにルナルの本文に對しかなりの程度取捨選択と補足とがなされた邦訳となつているのである。

それゆへ、本書は、各々の守備範囲ないし責任の所在については、若干明確さを欠いてはいるが、一応、ルナル、ロベルジュ、斎藤諸教授の共著になる新著である、と考へた方がよいかも知れない。

ともあれ、本書のような出版物が世に問われたことは、スガヴ方式に関心をもつ言語教師にとつてのみならず、日本の大学における語学教育の進歩にとつても、非常に意義のあることのように思われる。三人の著・訳者たちの努力に、筆者は深甚なる感謝と敬意を表したい。

付記

本稿は、書評の予定で筆を起こしたものであった。しかし、かなりの紙幅となってしまったので、一応、研究ノートとして発表させていただくことにした。お許しをこう次第である。